

保育者養成課程における障害理解教育

— 子ども学部初年次学生の障害理解の実態 —

Actual condition of knowledge and understanding of persons with disabilities of undergraduate first year students in the nursery teacher-training courses.

野澤 純子*・阿部 崇*・末廣 杏里*・宮島 祐*・田中 恵美子**

(*子ども支援学科、**教育福祉学科)

1. はじめに

障害理解とは「障害のある人に関わるすべての事象を内容としている人権思想、特にノーマリゼーションの思想を基軸に据えた考え方であり、障害に関する科学的認識の集大成である」(徳田・水野, 2005)と定義される。将来保育者や特別支援学校教諭を志望する学生が障害を理解し、障害児への適切な指導を行う上で、大学の養成課程における障害に関する授業内容や授業方法の検討は重要である。これに関し、大学生を対象とした障害理解の実態調査報告がある。大学の教員養成課程や保育者養成課程の大学生を対象に特別支援教育や障害児保育関連科目の履修前後の障害理解の調査が行われ、学生の障害理解の実態と授業後に習得した知識が報告され、授業内容について考察されている(原子, 2012; 和泉・田口・三浦・堂山・林・橋本・池田・小林, 2013; 鏡・大関, 2018; 庄司, 2013; 田口・林・橋本・池田・大伴・菅野・小林・三浦・戸村・村松, 2012; 東京学芸大学, 2010)。田口ら(2012)と和泉ら(2013)は、教員養成系大学の障害理解推進プログラムが、学生の障害理解にどのような影響を及ぼしたかを検討するために、通常学校の教員志望学生が履修する「障害児者の発達と教育」の履修登録学生741名について、障害理解と障害者のイメージの授業前後の比較、学生が授業を通して得た知識などを調査した。その結果、講義終了時には「ネガティブイメージ因子」の得点が低下し、「安全イメージ因子」「ポジティブイメージ因子」「心理的距離因子」の得点が上昇したことを報告した。原子(2012)は保育者養成課程の学生を対象に行った調査に基づき、障害児保育の授業を4ステップアプローチで展開し、学生の理解が深まったことを報告した。

子ども学部子ども支援学科では、幼稚園教諭免許状および保育士資格の取得に加え、幼稚園教諭免許状を基礎免許状とし特別支援学校教諭一種免許状を取得する教職課程を設けている。1年次と2年次に幼稚園教諭免許状および保育士資格の取得に必要な科目を履修し、特別支援教育教職科目を主に3年次に履修する。本学科では障害のない子どもの保育や教育に加え、特別な支援を要する子どもへの保育・教育に関する科目を多く開設していることから、障害関連科目受講前の学生の障害理解の実態を把握し学生の障害理解を深める授業内容を検討することは意義がある。

そこで本研究では、幼稚園教諭免許状を基礎免許とする特別支援教育教職課程における教育のあり方を提示することを最終的な目的とし、本稿では子ども支援学科初年次学生を対象とした調査により学生の障害理解の実態を明らかにし、2年次以降の障害理解に関する学習ニーズを検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 対象者

子ども学部子ども支援学科1年次学生のうち平成30年12月Z日の授業参加者122名を対象とした(回収率100%)。対象学生は、特別支援教育に関しては、1年次前期に「子ども学総論」の授業の中で特別

支援教育を紹介する導入的講義を受けていたが、専門的な科目は未履修であった。

(2) 調査時期と調査方法

平成30年12月Z日。子ども学部1年次対象の授業後に自記式質問紙を配布、回収した。

(3) 調査項目

質問項目はフェイスシートのほか、田口ら(2012)の調査項目を元にし、一部改変した次の項目から構成された。

1) 障害についての用語の知識

10個の障害名(知的障害、精神障害、聴覚障害、視覚障害、肢体不自由、発達障害、自閉症スペクトラム障害、ADHD、LD、ダウン症)と特別支援教育、インクルーシブ教育、ユニバーサルデザイン、合理的配慮の4つの用語について、「理解している」～「知らない」の4件法で評価するようになっていた。

2) 障害や障害者に関する経験

障害を題材とした資料を視聴した経験、障害を題材にした授業や課外活動の経験、障害のある人または障害のある子どもと関わった経験の有無について、それぞれの経験の時期(幼稚園、小学校1・2年、小学校3・4年、小学校5・6年、中学校、高等学校)について選択肢に印をつけるようになっていた。また具体的内容について自由記述を求めた。

3) ボランティアやアルバイトまたは就労経験について

保育ボランティア、障害児者に関わるボランティア、保育所・幼稚園のアルバイトや勤務経験、障害児施設のアルバイトや勤務経験のそれぞれについて経験の有無を質問した。

4) 障害者のイメージ

対象者が感じる障害者のイメージをSD法を用い、20対の言葉の対について該当する程度(7段階)の番号を選択するようになっていた。

(4) 分析方法

記述統計に加え、属性の別で比較した。障害イメージについては、各イメージの平均値の比較とともに、田口ら(2012)が実施した通常学校の教師志望学生を対象とした調査の同じ項目の結果との比較をした。

(5) 倫理的配慮: 調査の目的、個人情報保護および発表について口頭で説明した上で、同意をした人のみ回答した。

3. 結果

(1) 障害についての用語の知識

10の障害名と4つの特別支援教育に関連する用語について質問した。結果を図1に示した。

障害名について「理解している」の割合が高かった用語は、視覚障害63人(51.6%)、聴覚障害59人(48.4%)、ダウン症58人(47.5%)であった。一方、他の障害よりも「知らない」の割合が高かった用語は、LD30人(24.6%)、自閉症スペクトラム障害11人(9.0%)であった。

特別支援教育に関連する用語については、「理解している」の割合が最も高かった用語は、ユニバーサルデザイン51人(41.8%)であった。一方、合理的配慮は「知らない」が49人(40.2%)、「具体的にイメージできない」が51人(41.8%)、インクルーシブ教育は「知らない」47人(38.5%)、「具体的にイメージできない」が44人(36.1%)となり、2つの用語とも70%以上の学生がよく知らない結果となった。

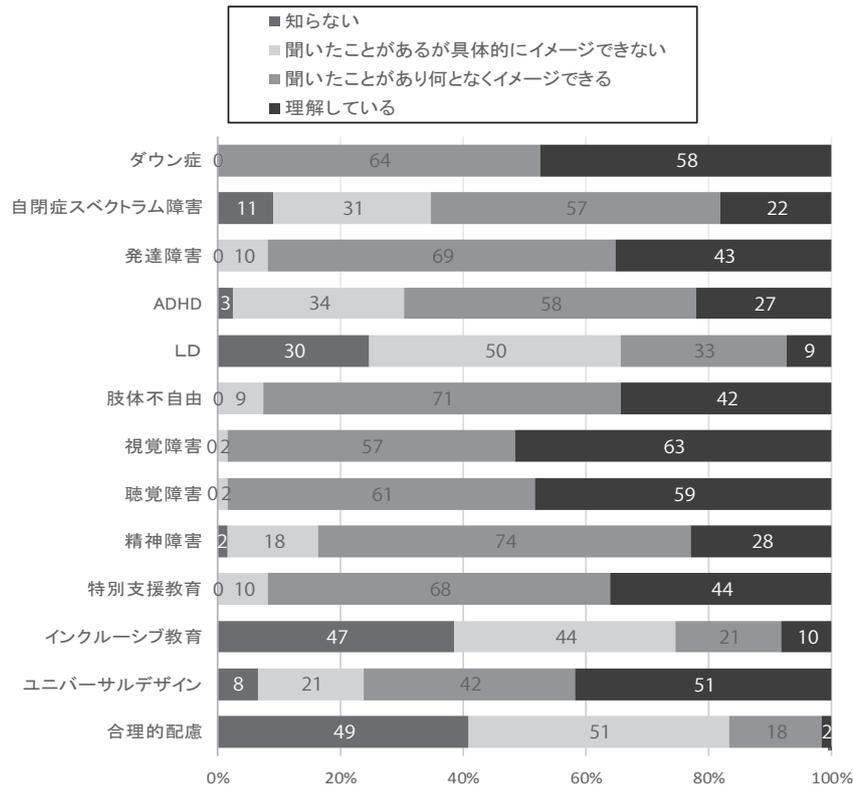


図1 障害に関する用語の知識 (n = 120 ~ 122)

(2) 障害や障害者に関する経験

1) 経験の有無

3つの質問のいずれにおいても70%以上の学生が「経験あり」と回答した。障害を題材とした資料を視聴した経験のありの割合が最も高かった。具体的には、障害を題材とした資料を視聴した経験は、経験あり104人(85.2%)、なしが18人(14.8%)であった。障害を題材にした授業や課外活動の経験は、経験あり90人(74.0%)、なしが32人(26.0%)であった。障害のある人または障害のある子どもと関わった経験は、経験あり89人(73.0%)、なし22人(18.0%)、無回答11人(9.0%)であった。結果を図2、図3、図4に示した。

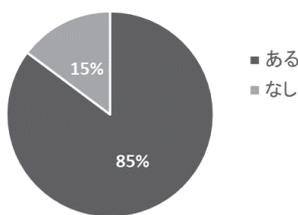


図2 障害を題材とした資料の視聴経験 (n = 122)

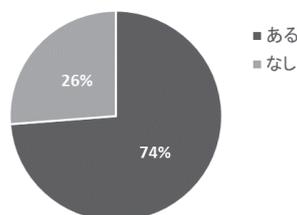


図3 障害に関する授業や課外活動経験 (n = 122)

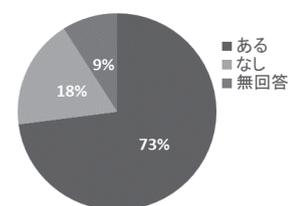


図4 障害児者と関わった経験 (n = 122)

2) 障害や障害児者に関する経験の時期

経験時期を幼稚園、小学校1・2年、小学校3・4年、小学校5・6年、中学校、高等学校の別で比較した。障害に関する授業や課題活動経験は小学校5・6年が最も多く、障害児者と関わった経験の時期は小学校3・4年、小学校5・6年が高かった。一方、障害を題材とした資料の視聴経験は中学校の時期が最も高く、いずれの経験も高等学校になると減少した。

具体的内容の自由記述では、障害のある同級生や親族、地域の友達や住民などに子どもの頃から触れ合った経験の回答が多かった。結果を図5に示した。

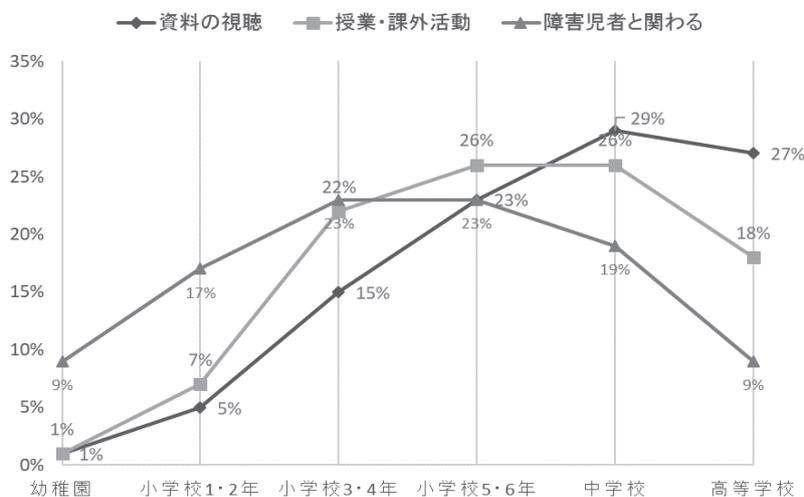


図5 障害や障害者に関する経験をした時期

3) ボランティアやアルバイトまたは就労経験

対象者の半数弱が保育ボランティアを経験していた(59人48%)。一方、障害児者に関わるボランティアの経験者は、27人で22%にとどまった(ある27人22%、なし95人78%)。一方、アルバイトや勤務経験のある学生はほとんどいなかった。結果を表1に示した。

表1 対象者のボランティア、勤務経験の有無 (n = 122)

項目	ある		なし	
	人数	%	人数	%
保育ボランティア	59	48%	63	52%
障害児者に関わるボランティア	27	22%	95	78%
保育所等のアルバイトや勤務経験	10	8%	112	92%
障害児施設でのアルバイトや勤務経験	1	1%	121	99%

4) 障害者のイメージ

対象者が感じる障害者のイメージを20対の言葉の対についてSD法によって調査した。回答をポジティブイメージにとても当てはまる；7点～ネガティブイメージにとても当てはまる；1点として、平均値を求めた。ポジティブイメージが高い順から、「個性あふれる」(6.3pt.)、「共生すべき」(6.2pt.)、「関わりたい」(5.2pt.)であった。次いで、「明るい」、「かわいらしい」、「迷惑でない」、「近づきたい」、「幸せな」がいずれも5.0pt.と続いた。結果を図6に示した。

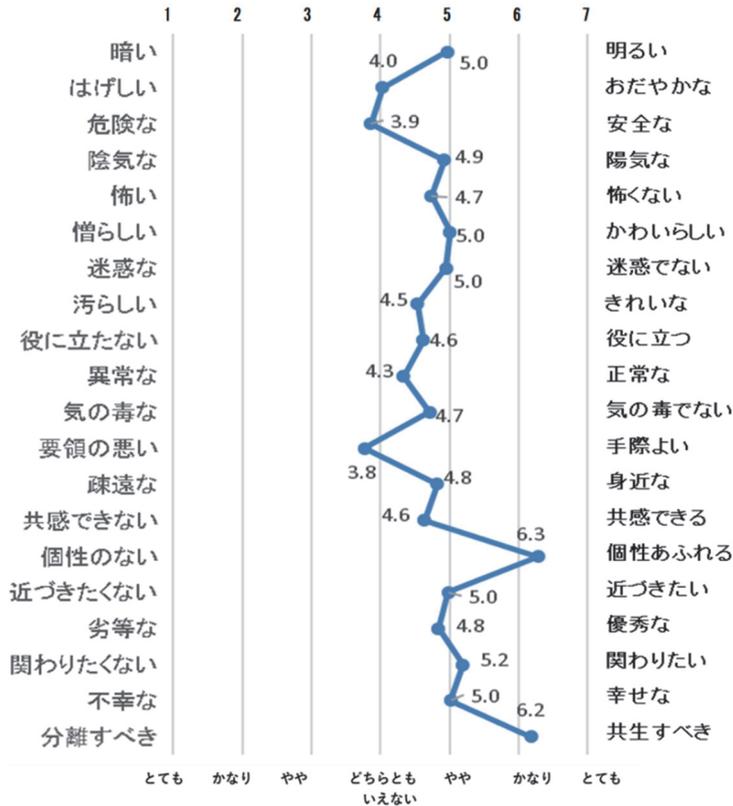


図6 障害者のイメージの平均値

4. 考察

本調査では、子ども支援学科初年次学生を対象に学生の障害理解の実態を調査した。

障害や障害者に関する3つの経験（資料の視聴経験、授業や課外活動経験、関わった経験）の結果を先行研究（田口ら、2012）の結果と比較すると、本調査対象者は、全項目において経験ありが多かった。田口ら（2012）の対象者は通常学校の教師志望学生であったが、一方本調査対象の学生は特別な支援を必要とする乳幼児や児童・生徒を対象とした保育者や教員を養成する課程に在籍している。本調査対象者の幼児期から青年期までの様々な障害に関する体験が、学生が本学部を目指す要因の一つになっていると推察された。

経験の時期は田口ら（2012）とほぼ同様の結果となった。小学校3年生から6年生までの経験が多かったのは、通常の学校においては小学校中学年高学年に、車いす体験、白杖歩行体験、または手話体験などの障害者理解の時間を設けていることが多いこと、特別支援学級や通級の児童生徒との関わりの機会を設ける取り組みとも関連すると考えられた。具体的内容の自由記述では、障害のある同級生や親族、地域の友達や住民などに子どもの頃から触れ合った経験の回答が多く、子ども期からの体験が青年期の共生や障害理解を深める機会を求める行動につながる可能性が示唆された。

障害者のイメージは肯定的なイメージを持っている学生が多かった。先行研究（田口ら、2012）で採用した項目の平均値と比較すると、「個性あふれる」、「共生すべき」、「関わりたい」、「明るい」は両調査ともに肯定的な値であった。一方、「幸せな」は、先行研究では平均値が当てはまらない範囲（5段階1点から5点の評価の2.8pt.）にあったが、本調査対象者で肯定的回答（1点～7点の評価の5.0pt.）となった。また同先行研究では「気の毒な」、「身近な」の平均値が中立（5段階1点から5点の評価の3.0pt.）であったのに対し、本調査では、「気の毒でない」、「身近な」に当てはまると肯定的に回答した学生が多かった（1点～7点の評価の4.7pt.4.8pt.）。本調査では、障害児者に関わった経験の自由記述の内容に示さ

れた通り、過去に身近に障害児者と接した経験のある学生が比較的多く、それらの経験が障害児者への否定的イメージよりも肯定的イメージが多い結果につながった可能性が推察された。

今後の課題として、本学部における障害理解教育に関しては、1年次以降も学生の興味や意欲を維持し、専門的な知識・技能を教授する上で、学生の興味やニーズに沿った主体的な学びの経験を提供することが必要である。加えて、保育や教育の実践において活用可能な科学的な見方や判断につながる深い学びを提供するための指導内容の検討が必要であろう。他方、保育・学校教育の視点からは、子ども期に身近にいる障害児者と触れ合う体験が、適切な障害理解の形成や、青年期移行の共生社会実現や障害児者支援への興味に繋がる可能性があることから、共生社会の実現に必要な具体的な指導や環境設定をエビデンスに基づき提案していくことが必要であろう。

参考文献

- 原子はるみ (2012) 障害理解へのアプローチ - 「障害児保育」における変容過程. 北海道教育大学紀学校教育学会誌. 17, 55 - 64.
- 和泉綾子・田口禎子・三浦巧也・堂山亜希・林安紀子・橋本創一・池田一成・小林正幸 (2013) 通常教育教員養成における特別支援教育プログラム構築のための基礎的な検討(2): 教師志望大学生の障害者理解と障害理解教育に関する調査東京学芸大学紀要総合教育科学系, 64(2), 235 - 243.
- 鏡昭子・大関嘉成 (2018) 保育士養成校における「障害児保育」学習者の事前認識に関する一考察. 羽陽学園短期大学紀要. 10(4), 75 - 89.
- 庄司和史 (2013) 大学生の障害理解学習について - 「特別支援教育の理論」履修前アンケート調査より. 信州大学人文社会科学研究 7, 159 - 173.
- 東京学芸大学 (2010) 中間実施報告書, 特別支援教育時代の教員養成システムの開発～客観的なアセスメントと指導計画の作成できる小中学校等の教員養成を目指して～. 平成20年度採択質の高い大学教育推進プログラム (教育GP)
- 田口禎子・林安紀子・橋本創一・池田一成・大伴潔・菅野敦・小林巖・三浦巧也・戸村翔子・村松綾子 (2012) 通常教育教員養成における特別支援教育プログラム構築のための基礎的な検討 - 教師志望大学生の障害者理解と障害理解教育に関する調査. 東京学芸大学紀要 総合教育科学系. 63(2), 303 - 319.
- 徳田克己・水野智美 (2005) 障害理解教育 - 心のバリアフリーの理論と実践. 誠信書房.

附記: 本研究は、私立大学研究ブランディング事業「インクルーシブな教育推進のための障害理解推進モデルの構築—教員養成・現職教員研修教材の開発—」による研究活動の一環として行われた。